「病む者は、誰か」

―寿から釜ケ崎を見て―

木下陽吉

「ぬくもり」を失った街

ふとしたことで、「釜ケ崎の人々」に関わるようになって、第一に言えることは、こゝには、「ぬくもり」が無いことを、したゝかに知った……ということである。つらくも、悲しいことと言わねばならない。

「ぬくもり」は、何処に去って行ったのであろうか。元から無いはずはない。「ぬくもり」を創出し、もっと熱いものに出来ないだろうか。局部的に「ぬくもり」があっても、何にもならない。薄められたものを、もっと濃くは出来ないだろうか……。

様々の想いの中で、この「ぬくもり」を考え続けて行くうちに、その想いや、思考は、怒りに変わり、小さな働きに変って来たことを、私自身が、知り始めたと言うことになる。

「ぬくもり」を少しでも創り出すために……。

「ぬくもり」が無いことは、「冷たさ」と「寒さ」があることになるし、「こごえ」というきびしい現実に直面することになる。

それは、何処から来るのだろうか。その原因は、その背景は何だろうか。

「まなこ」をこらして、良く見つめ、静かに考えて見れば、その正体は霧の中から少しづつ次第に見えて来るし、やがてその全体像が明らかになって見えて来た。

現時点では、その正体に立ち向って行きたいという願いが、怒りに裏打ちされて、出て来た私を発見する。

歯に衣を着せることなく、言うならば「ぬくもり」を無くし、「冷たさ」を助長し、「こごえ」をもたらしているものは、行政のいわれなき「人間不信」と「人間不在」があるからである。何故そうなのか。理由は、極めて簡単にして明瞭。「地下足袋」や「作業服」を身につけている人は、人間らしい生き方をしなくとも、当方は関知しない。その生き方は、自分自身が考えて行くべきであるという論理に裏打ちされた本音が、まかり通っているからに外ならない。

これが、余りにも露骨であり、同じような条件、環境にある地域が、他に存在しても、こんな状況下にある地域が、まず無いといっても決して過言ではないと云える。

それは「病気」「アブレ」「青カン」「飲酒」「行路病死」や、それから派生する様々な困難事が、恐るべき数字となって、私達にせまってくるからである。

私達は、冷やかな目でこの数字を受け止め、分析し、手立てを尽くし、叫び、そして祈って働き、斗う決意をするまでである。

蹉跌

聞くところによると、「釜ケ崎の人々」へは、何十億という公の金を、直接・間接的に用いているという。しかし、その実、行政効果が何らあらわれていない様に見える。

その証明は、三〇億とも、四〇億とも言われる「釜ケ崎の人々」への医療費公費負担をしていながら、先ず「結核予防法」の法実施展開の蹉跌があげられる。

何故ならば、西成保健所のレントゲン定期検診の結果と、厚生省公衆衛生局成人病課編「結核の統計一九七七」と対比するとすぐうなづける。西成保健所の統計

一〇、〇〇〇人中一、三三〇人罹患、全国平均（七〇才以上で）は、一〇、〇〇〇人中一二六人罹患である。実に一〇・六倍の罹患率である。結核はかつて、亡国病と言われたが、今日ではすでに絶滅したと言われる。しかしこの地区では別格である。問題は、統計上に出て来た数字が多い少ないではなく、その取り組みである。

殆んどの患者を野放しにしていることが、問題なのである。単純計算をしても、数千人の人が野放しになっているし、街中結核菌が蔓延していると考えられる。

どんな対策をしているのか聞きたいものである。入院させても、すぐ自己退院、強制退院してくるので、やる気になれないと、係官は言っているが、一口に言えば、結核と四つに取り組む姿勢がないからである。

この地区の結核を、この地区から追放するまでは、体を張ってやるのだという不退転の決意をもって、日夜働くならばいざ知らず、すぐ自己退院、強制退院するから、やる気になれない……と言う、言い草の本質には、「差別」があるからで、「人の痛みは三年でも我慢する」と言う譬の通りである。

「人の痛み」を「自分の痛み」として感じるか感じないか、それを実行するかしないかではないだろうか。

それが、なされていない為に、こゝの結核予防法は、形骸化していると云わざるをえない。今すぐに、結核と四つに取り組むためには、何をすれば良いかを考え、強力で、弾力的な手を次々に打って欲しい。

さもなければ、この地区は、日本最大の結核汚染地域の汚名を末永く止め置くことになる。特に「第三五条患者」は、何をおいても入院する体制を今すぐ、組んで欲しい。

他に、肝機能障害、消化器疾患、高血圧などなどに、罹患している人も、随分多く、怪我人の多いことも抜群である。

体具合が悪い、生活に困難を来たした等の理由で、友人・知人を頼れない人は、必然的に、地域の相談機関である「大阪市立更生相談所」＝「市更相」を訪れる。

しかし、その対応は、極めて事務的・且つ極めて官僚的である。

実施機関である「市更相」を、筆者は、何度か訪れて、その現場を見、話を聞いて見た。そこにあるものは、下手に出る大人しいケースの相談にのるが、不良ケースと云われる酔った労働者、保護歴のある人を、篩にかけ、拒否する仕事をしているかに見えた。酔わなければ、相談に来られない労働者の心情を察し、何故酔わなくとも入って来れる指導をしないのか。酔いを覚まし、素面で対応できる方法なり、施設・設備の改良をしないのか、不思議で、不思議でならない。

何故ならば、今すぐ入院しなければならない人も居るし、飢えで口も満足にきけない人もいるはずだから。

「余りにも、相談者が多く、その対応に困却している。」殆んどのケースワーカーは、なげきをしていた。相談者が多く、ケースワーカーが少ないならば、仕事がスムーズに流

れるだけの人員配置を、要求すれば良いのであって、当り前の、最低のことをしないことが問題ではないだろうか。

これらのことを知るためには、所員全員現場での実践もさることながら、先ず、「野に出でよ」と筆者は叫びたい。明日への希望を失いながらも、必死に我を忘れる為に、又寒さと斗うために、飲酒をし、野宿を余儀なくされている労働者の群に、その身を投じ、自分は何をすれば良いかを真剣に考えると同時に、この人々の群から学ばねばならない。

酒を飲んでいるから、前に保護歴があるから、相談を、申請を拒否する前に、苛酷な現実と寒さから逃避しようとして酒を飲む情況と、人としての弱さを知り、手を差しのべる勇気はないのか。

開放性結核と肝臓を病み、「市更相」に、入院加療の相談に行ったが、保護歴があることを理由に、にべなく拒否された例や、その外火傷をして手当を受けるべく相談に行ったが、これ又、保護歴があることを理由に、相談以前に拒否された例等、余りにもその数が多いことに全く驚く。

こゝでは、法を守り、法の実施、展開するファーストシーンから、法の良心に反し、矛盾していることが多過ぎるし、人権無視が公然と行われていることに、激しい怒りと、深い悲しみを感じる。

行政は、申請主義であるから、申請の受理の可否・許認可するのは、行政の裁量によるという論理がまかり通るのであったなら、そこに存るものは、血の通わない、通り一遍のものでしかなく、正に「人間不在」そのものであり、行政の自己保身と、仕事量の減少指向であり、いわれない財源カットと云われても仕方ないし、昔の代官そのまゝの体質であろう。

これらのことは、総べて、行路病死に連結している。路上で、公園で、人が死ぬということを何と考えているのであろうか。しかも年間三〇〇人の行路病死のある地域が、他にあろうか。何と表現してよいのか、その言葉を知らない。

静かに、レクイエムを送ると共に、絶対人を殺さないよう、出来得る限りのことをするだけである。

よく「人の生命は、地球よりも重い」と云われる。しかしこの地域では、「（人の生命が何ものよりも尊いと言うのは、ものの譬であって）日雇労働者の一人や二人、死ぬのは自業自得だ。」と言われる。この言葉を、行政の人々、地域の人々が、平然と抵抗なく発言できる風土は、どうして出来るのであろうか。正に人権無視、差別であり、恐怖そのものである。そこには、悲しい、冷たい人間否定と、軍国主義思想を見ることが出来る。

今、「人の生命が、地球よりも重く」「人の生命が何ものよりも尊い」のであったなら、その責を全うしようとしている、知事・市長・西成区長・行政より地域の厚生活動を委嘱されている民生・児童委員、民協、更に、市更相、保健所職員や、すべて「釜ケ崎」に関わる人々は、じっくり目を、この人々にむけ、立ち上り、行動を起こして欲しいと切に心から願うものである。

連らなる山脈（やまなみ）

労働者が、働く意慾があるのに、アブレるということは、一口に言って見れば、国の、府の、市の労働行政が貧困であるからで、その権利を認めていないことになる。法が不備なのか、労働者は、無権利でもよいということなのか。

手配師による、所謂門前雇傭や、モグリ手

配、斡旋が、野放しになっているのを見て、見ない振りをしている現状はどうしたことなのか。しかも、その数が、数百に及ぶこの地域は、見るものをして寒々としたものを感じさせる。

労働基準法第六条には「何人も、法律に基いて許される場合の外、業として他人の就業に介入して利益を得てはならない」とある。

これは、中間搾取の排除をうたったものであるが、空文に美しいことを一度でも、釜ケ崎から仕事に行った人は皆知っている。

法律に基づいて許された業者のみに、許認可する認証を与えて、モグリ業者は、絶対排除するように努めねばならない。

中間搾取つまり、人の汗をかすめとることは、人としていやしむべきことであることを厳然たる法認識の立場を、大衆に知らせる作業を確実に行うと共に、就労したい労働者には全員、その責任に於いて、就労せしむるのが行政である。

この権利を認めないで、反面二ケ月間一定の就労した証明の印紙と、証明書が無ければ、失保・健保の権利を失うというのは、滑稽である。

何故ならば、モグリの業者を野放しにしておいて、その業者の仕事に行った場合、印紙又は、就労証明書は、発行しないからである。この様に、法を守らない業者を見ても、見ぬ振りをして、一方では、失保・健保受給権利がないと言うのは、法治国家の一機関のすることであろうか。この事は、充分なる公的な仕事の斡旋があれば、話は別なのだが……。

人が仕事をし、その収入で生活してゆく場合、最も大切なことは、いかなる理由があっても、ピンハネなどは許されないことは、明白である。

こゝにも、甚だしい「差別」が存在することを知る。そしてこの事が、「アブレ」「病気」「行路病死」に一直線に連らなる山脈を見る事が出来る。

淋しい樹木、悲しいベンチ

釜ケ崎以外の町で、住民に断わりなく公園が閉鎖されたら、その町の住民は、住民大会を開き、大騒ぎをするだろう。今釜ケ崎ではいくつかの公園が、閉鎖されている。行政自らが、文化を破壊しているその姿を見ることが出来る。釜ケ崎の公園は、その環境によって、他の地区の公園と違った、大切な意味をもつ公園が閉鎖されたことは、行政の一大汚点の一つに挙げられる。

公園は、大人も子供も、憩いと息抜きの場である。今大切な意味を持つと述べたのは、釜ケ崎の人々が情報交換の場として、交流の場として公園が用いられるからである。列悪な環境下にある宿泊所から、抜け出して、しばし憩う処が公園でもある。ベンチがあり、樹木があり、水飲み場がある処、それが公園であるとするならば、それを、改良工事をするという名目で閉鎖するのはどういう訳か。工事をすると云っても、ついぞ工事をしたのを見たことは無い。それは明らかに嘘で、越冬の炊き出しの場となることを恐れるからだ。それが証拠に、炊き出しの終了日たる二月二十八日と閉鎖終了日と一致するからだ。

「公の園」の閉鎖によって、故意に潰え去られた、エネルギーつまり、労働力再生産の場であった公園の閉鎖によって失われたものは、永久に返っては来ないが、心せねばならぬことではないだろうか。

今、考えるに、失われたものへの、「うらみ」だけが残っている。

そして、地下足袋を履く人には、公園なぞ必要ないのだということを、実行して見せて

くれたこの事実は、しっかり心にきざみこんでおくべきであろう。

公園に関わる行政官は、どのようなプレッシャーがあろうとも、公園、つまり地域の文化は、地域の人と、我々が守るのだという姿勢をあくまで守って欲しいものだ。

寝覚めの悪さ

人々は、この国の農村・漁村・山村・炭鉱構造の急激な変化によって、好むと好まざるにかかわらず、その生産の場を奪われた。その為に、生活の場を失った人々の多くは、都市へ都市へと流入し、「日雇労働者」になったのである。その根っこにあるものは、GNPの急上昇指向を志した、この国の経済優先思想であり、「列島改造論」であり、結果的には、多くの人が目標とさせられた、アメリカナイズされた中流志向思想であった。

一見、聞えの良いこの発想は、数多くの人々の犠牲の上に立っていることを、私達は知っておかねばならない。この意味に於いて、人々は、「加害者」としての一員である自分自身を知らねばならない。

「ムラ」といわれた共同体が、かゝる理由の一端によって殆んどこわされ、エネルギー政策の一挙の転換によって、その場を失った、炭鉱の人々、そして今、企業の合理化・倒産などによっても、人々は余儀なく「日雇労働者」になった人も多く、構造不況といわれる不況を、増々拡大して行くであろうし、インフレーションの波はじわじわと、人々の生活を苦しめて行く。

この状況の中で、「日雇労働者群」は増加こそすれ、減少することは、方向の転換をしない限り、決して無いものと思うものである。しかもその権利を奪い、差別をし、押さえに押さえている以上、この国は、どうしようもない処へ行くであろう。

そして歴史の批判を受けることになる。

政治の貧困、哲学の欠除を問うことは、易しいことである。人々をいわれなく差別することも亦、簡単である。口を閉ざして、無言の尽、手をこまねいて差別することは、もっと簡単である。

その責任を、たらいまわしにすることも同様である。

しかし、人はその良心から逃がれることは、決して出来ない。その後ろめたさと、同時に、寝覚めの悪さから逃避することは、決して出来ない。

人が人をして、人の尊厳を、互いに尊ぶことがない都市は、やがて滅亡して行くことを、歴史の現実として、私達は知っている。

さて、昨十一月大阪市民生局長は、「キリスト教釜ケ崎越冬委員会」＝「越冬委」の陳情を拒否した。他の部局、課でも多くの要望、陳情、話し合いの拒否は、枚挙に暇がない。行政として、一市民の問いに答えないというのは、その「主権在民」たる憲法に、逆行するものではないが、まして「越冬委」や「釜ケ崎日雇労働組合」＝「釜日労」は、行政が、当然なすべき越冬、労働相談、医療等々の仕事をしている団体である。丁寧に礼を云われることすらあっても、拒否されるいわれは、何一つ無いはずである。

そこに見られる姿勢は、「口も出さない、手も出さない。金も出せない。釜ケ崎の越冬は、行政がやるのだ!!」というもの以外の何ものでもない。百歩ゆずって、それなりの仕事を、出来ないながらもしていたなら、それなりの評価は、受けるであろうが、税金の無駄使いと、行政効果が、何ら出てはいないと思われる。これは、納税者として、云う権利のもとに、云うのである。

その根拠と、証明は、例年鳴りもの入りで行われる、行政越冬、即ち本年は、南港に建設される「越年無料宿泊所」＝「臨泊」は、南港かもめ大橋々詰プレハブ八棟、（八〇〇人収容）自彊館（二〇〇人収容）への収容である。これが経費は、一億数千万円と云われる。十二月二十九日から一月十日迄の間に消えて無くなるという現代の、「おとぎばなし」で、末永く、語り草になるものである。

諸掛り一億数千万円が、この「臨泊」にかかるのは、良しとしても、それが効果的に、つまり入りたい人が入れない。入らなくても良い人が入っているということである。これは、一歩あやまると、凍死を意味するという重大な問題を含んでいるということである。

具体的には、労働手帖・宿泊所の宿泊証明領収証などによって、宿泊が出来、又病人、病弱者も申し出れば宿泊できるいうが、現実はどうであろうか。

この「臨泊」が開かれている期間中にも、「大阪社会医療センター」の軒下に、「越冬委」の用意した、毛布や布団にくるまり、「越冬実」の炊き出しを食べている百何十人がいるのか。数えて見て欲しい。

相談に来ないのが悪いという前に「目くばり」がなさすぎるのではないか。

労働手帖・宿泊証明をもっている人を泊める前に、野宿労働者がいなくなるような手配をするのが、先決である。

これが、前述の、行路病者・行路死者にも直接・間接的にも連結しているし、監査官は、その実施内容をも監査して欲しい。

沈黙は、この場合、「金」ではない。沈黙は、とりもなおさず差別していることになる。

貧しい人々の群は、増々貧しくなる一方である。「むれびと」は何処へ行こうとするのであろうか。

病むものは誰か

さて、「越冬」の主体は、勿論「労働者」自身でなければならない。だから、「越冬委」の組織する「越冬」に、五〇〇に余る「教会」や、数多くの「キリスト者達」が支援し、労働者を支援するという形をとっている訳だ。従って、幾千人となく、「キリスト者」と「教会」はこの「越冬」に関わっていると考えられる。「人が死なずに春を迎えるために」

しかし、その関わりの中で、「キリスト教の越冬」は、行政補完をしているのではないかとの疑問や、問題提起がしばしばなされるし、過去にもその例は、多かった。それに対する対応は、「行政側が、労働者の立場に立って、越冬するならば、越冬を組織する必要も無し」とし、「生きて春を迎えよう!!」「病人を入院させろ!!」「公園を再び開け!!」「仕事を出せ!!」と叫ぶ必要もない。とする。

人は、生きて、春を迎え、桜花をめで、病人は治療を受け、入院が必要な人は入院するし、仕事をしたい人はするというのが、ごく当り前のことで、日常的で、極めて平凡なことなのだから。

しかし、しかしながら、このごく当り前で平凡なことすら出来ないで、サボタージュしているところが、重大な問題で、且つ、社会問題である。今必要なことは、真剣な「目くばり」である。逆転している発想を、逆転せしめねばならない。

病む国の、病める地域を、じっと見る時に病むものは、実は、行政であると、気がつくのである。

病めるこの構造は、何処より来るのか。

釜ケ崎の労働者は、住民登録をしている人が、ごく少数だからなのか、定着性がなく、選挙権を行使する人が少ないからなのか。地

下足袋・作業服装の人が多いからなのか。

答は、住民登録の有無でも、選挙権のあるなしでもない。

仕事を多く出し、アブレることを少なくする。そして病気になっても、すぐ治療できる地域で、最低のことを、すぐに出来る土地であったなら、住民登録もなされるであろうし、この土地を一生の住家としたいと念うであろう。この常識的な施策をせず、責任の転嫁しているところに病める構造が、存在し、人々をして、増々苦しみの世界へ歩ませるのではないだろうか。心せねばならぬことは、その点にこそあるのだ。「人間を返す」手だてを、発想を、持ちたいものである。

ぬくもりの街

釜ケ崎と逆の地域を筆者は知っている。そこは、「横浜寿町」である。

その中心にある、「横浜市寿生活館」は、「市更相」とよく似た性格をもつが、先年の越冬のトラブルから、その行政責任をはたしたし、「生活館」の行政効果は、疑問だという、極めて不条理で、一方的な、市当局の論理によって閉鎖された。しかし、その職員の半分は、地域にとどまり、野に出でて、路上で、宿泊所で、労働者と水平の立場で、相談にのり、身銭すら切って、日夜働いている。閉鎖された「生活館」のシャッターの前の、階段踊場に、古机一個と、椅子二三脚で、相談を受け、テキパキと事案を処理、救急車を呼び、病院訪問をし、衣類を探し、着て頂き、一生懸命に働いている姿を、見ることが出来る。そこには、所謂「市更相」式の発想はなく、酒酔いの労働者には、酔いをさます方便をし、飢えにあえぐ労働者へは、パン屋に走り、自分達も一緒に食べている姿をじっと見ていると、胸が熱くなるのを感じる。何の「けれんみ」も無い、その生きざまは、お互いに厳しい状況下にありながら、「働くもの」として、「働く」労働者と同じ立場にあると同時に、「人間」として、「人間」が共に生きて行く姿勢に必要なものを、兼ねそなえていることが、あざやかに、浮きぼりされている。

地域のセツルメントたる「神奈川県匡済会寿福祉センター」は、前記「生活館」の職員を四六時中応援すると同時に、老人問題、こどもの問題、治療活動などに、四つに取り組んでいる。こゝも誰にでも門戸を開放し、何ら差別はなく、便箋とボールペン、ついでに封筒と切手を貸して欲しいなどという要求も随分見られるし、心良く貸してあげる姿が見られる。正に「地域のセツルメント」ではないか。

「横浜市中保健所」の保護婦さん達は、一軒一軒、宿泊所を歩き、結核患者の発掘、病気の早期発見治療、乳幼児検診、栄養指導と発達保障などに、時間を問わずにこつこつと働いている。

この人達にとっては「寿の町」は、自分自身の分身なのだ。

又、「横浜市中福祉事務所」も「中民生安定所」と云われた時代から、福祉本来の使命と、責任をはたすべく、働いている姿をみることが出来る。少くとも、福祉は何をするか何をしなければならぬかを、皆が何時も、反映していると人々に告げている。これが仕事の上に反映していることを、人々は知っている。

一口にいって、これら行政の人々も、地域の人々も一体になって、互いに助け合っているのが寿の町の姿である。

こう述べると、ユートピアの様に聞えるが、必らずしもそうではない。野宿労働者も少な

いながら見られるし、強制・自己退院も少なからずあるし、現場では、若干のトラブルもなしとしない。「差別病院」もあるし、「マグロ師」といわれる「路上強盗」も存在する。しかし、野宿労働者・強制自己退院者へも、きめ細かく対処しているところが、「釜ケ崎」と違うたゞ一点である。

野宿労働者のための働きは、地域の人々と、「寿日雇労働者組合」とが、連帯しつつ行われ、宿泊・食事を共にし、仕事着・地下足袋の調達、仕事の世話、又「対県交渉」（労働部交渉）もすることが、行われている。

これらの事は、紙面の都合で、短く述べて見たが、多くの活動家の、地域住民の組織化以前からの活動の積み重ね、幾回とも知れぬしめつけをはね返しつゝ、歩んで来たものの成果であることを見ることが出来る。

「寿の街」にあるもの、流れているものは、共感思想と、共有発想である。

「差別」がない訳ではない。厳然として「差別」は存在する。手直しされなければならない問題もある。しかし、問題意識をもって、日常的な斗いをしている人々が、「キリスト者」「労働者」と「行政」が対立している「釜ケ崎」とは本質的に違うところに意味があると考えざるをえない。

「白手帖」問題に見られる苦しみを、今少しづゝ話し合いを続けているのが、現状である。

東京都は、その越冬対策として、例年「特出し」と云われる仕事を、日雇労働者に優先的に提供している。「特公業」と云われる、この仕事は、日当数千円と云われ、一日数百人の労働者が働いていると云われる。

大阪に於いても、このような仕事は出来ないものだろうか。「東は東」「西は西」ということなしに、大阪府は、大阪市は、何が出来るか、を示して欲しいと切に念じるものである。

一連の問題点指摘や、問題提起に答えて頂きたい。その為には、日雇労働者も「人」否、日雇労働者が人であることを覚え、そこから出発して欲しいと心から念ずるものである。

行路病死者が、三〇〇人以上もいる。結核患者の野放し、法が空に、浮いていること。この人達と、関わって欲しく、その視点をどこにおくかにかかっていると考えるものである。

「いのちを返せ」という叫びに耳をかす姿勢と、それが何を意味するかを、冷静に、考察して欲しいし、「声なき声」を知って欲しいのである。

労働・法律・医療・保健衛生・住宅等々「釜ケ崎」に関わるすべての人々の、シンポジウムを開き、従来の施策を総括し、そこから引き出される結論を尊重し、ダイナミックに、「人間の」「人間のための」「生命ある」施策を強く期待するものである。

私達は、筆者を含め、この地域が「人間の」地域になる迄、尽くし、叫びつづける。

今、筆者は、紙面の都合で、述べたいことを、短かく云わねばならぬことを、極めて残念と思い、そのはがゆさを、かくし切れないことを告白し、祈るものである。

最後に、横浜の友なる人から来た手紙を紹介したい。

現場から生え抜きの労働者が、労働者を見る、したたかな目が、それを語っているからである。

前略、その後お元気ですか。今度の釜ケ崎行きには、大いに世話になり、お礼します。結果5日間働いて来ました。センターの下にも行き、労働者と話しをしたりすることがで

き、参考になりました。帰途は挨拶せず、すみませんでした。メモを無くしたものですから。夜間学校の人から聞いて便りを書いて居ます。釜ケ崎では、守口と四丁（筆者註四条畷か）の方の現場に行って来ました。ボーシンがいばっていました。デズラも寿町より、千五百も安く、びっくりしました。約束より違うのです。

こちらは、〝地域懇〟の働きで〝勤労協〟の中に労働者の診療所ができることになり、市予算にも計上され、後は医師がどんな人がくるか、看護婦はどうするかなどといったこまいつめをするだけです。運営面で、地区の労働者がどう関係して行くかが、問題となっています。わずかの間に、地区の住民がまとまれば、牛のようにのろくさい行政でも、馬のように走らすことができることを知りましたし、この事は、寿町の歴史始まってから、沢山の歴史的動きの中の一つとして大きく評価されてよいことと思います。

飛鳥田市政の時に、出来ずに、保守である細郷市政の時に出来るとは、皮肉なものですネ。〝地域懇〟の中でも夜間学校の○○ちゃん、○○さん、○○さんが、とてもよく働きました。

寿町には、近くに横浜最大といわれる横浜市大病院、港で一の国際親善病院、中央病院など、十六七の大小病院がありますが、あまりピカピカで入りにくいんです。

又〝寿病棟〟と悪名高い○○外科もあり、（まあ、酒を飲んで暴れなければ、診てくれますが）まず冷めたい病院、ややこしい病院も、少しあります。今度は、この地区の中に出来るのですから、〝俺たちの診療所だ〟というつもりで、酒酔いは、皆で外に出す位のことをして、守っていこうと話をしています。

〝手づくりの診療所〟ができました。先生にも、色々と世話になりありがとうございました。今後共よろしくお頼み申し上げます。皆からも、よろしくと申しています。去年十一月に寿町に来た大阪の人は、〝寿町は牧歌的だ〟と云われ、夜間パトの中で〝寿町は翔んでいる〟と云われたと、この前先生から伝えられましたが、面はゆい感じです。今後もっとふんどしをしめてやります。まだ生活館再開のこと、クスブリのこと（筆者註野宿労働者のこと）、勤労協の前向きのことなど、問題が大山のようにありますが、少しづつ皆が、よくまとまって、解任して行くべしと話をしています。〝寿日労〟も一時と違って、〝地域懇〟にも参加しましたし、皆仲良くやっていますのでご安心下さい。

正月には、皆で楽しく大々的に、「冬まつり」をしました。のどじまん大会、もちつき、年越そば、病院訪問等々で、今年は、最高と云えるでしょう。マグロも少くなった様です。

越冬も一月半ばで終了、総評からの米のカンパ、余った分〝釜〟に送るべしということになりました。

釜ケ崎は、寿に比べて、ドヤもより非人間的で、道路、公園もとても不潔でした。クスブリ、病人、老人の多いのには、日本国中、又（筆者註・股）にかけて歩いた私ですが、改めて驚き、しみじみと考えました。泣けて来ました。

センターの下に、一〇〇人以前（筆者註・以上か）ねていました。

TV（筆者註・TB）の人、怪我びと、歩行困難な人が、うろうろしていました。酒飲みが多く、向いの店や、住宅の方や、道路で、立ち小便をしていました。

民生委員（筆者註・寿では、福祉の人をこう呼ぶ）は、何もしないで眠ってるんですか。聞くと、何度相談に行っても、前があると、（筆者註・保護歴）追い帰されるちゅうこと

とです。何人もそう云ってました。
寿でも、多少はあるけんど、何とか、病院に入れます。
大阪市役所の前で、どなってやりたいと思ったし、民生委員は、白い目で見るんでなく、クスブリから出るよう、手を差しのべるのが、商売でしょう。クスブリが、居て、始めて、めし食えるんと違うか、と思います。
親方日の丸結構毛だらけです。
寿の民生委員や、保健の人（筆者註・保健婦）や、町の人みたいに歩きまわって、仕事をして下さい。私は、法律を勉強したから、わかるんだけど、すべての問題は、法律で解決するんでなく、人が解決するんだということです。世の中、全部そうなっているんです。
例えば、足利の田中先生、神奈川県令の大江先生がそうです。まだ沢山います。その例沢山ありです。
今〝釜ケ崎〟に必要な人は、歩きまわって仕事をする人と、〝本物の人〟が出てくることです。決断の人です。
酔った人を病院に入れることは、仲々むずかしいことです。けれど、やる気でやれば出来るのです。入る人も、飲まないで、自分のことだから、治療第一に、真剣に考えなきゃいけません。それから仕事を出すこと。
皆が、力を合わせれば、出来ないことはないと思います。
このまゝにしておくことは、シベリヤのラーゲルや、ナチのゲットーに近いみたいです。
〝釜ケ崎〟はそんな感じに私には、どうしても見えるのです。
アブレ←→飢え←→クスブリ←→酒←→病気のくり返しで、死が目前にあります。この中に、政治が入っていません。民生委員は、少しは対策してるつもりかも知らんけんど、何もしていないといっても、良いです。
政治が、仲間に入らないのは、不思議でした。新聞も、もっともっと大々的に、取り上げないから、良くないと思います。
先生方は、この人達の面倒を見て、ご苦労さんです。
面倒を見るのでなくて、労働者を中心にすえて、この労働者から学ぶのだとしかられましたが、本当に大変ですね。
体の調子は、よくなりましたか。何でも徹底してやるので心配です。
夜は暗く、朝は遠い感じをつかんで帰って来ました。しかし〝生きて春を迎えよう〟のとおりに、がんばって下さい。きっと、朝は来ます。
何時も、〝釜ケ崎〟の労働者のために、祈っています。寿もがんばります。
少しですが、千円入れました。名は出さないで、足しにして下さい。
私も、少しかせいで旅出ちします。
沖縄の〝共同店〟をみて来たいし、この〝共同店〟が本物みたい気がするので、ゆっくり？　働きながら、歩いて考えてみたいと思っています。
先生が云われた〝アルコールの問題〟を時間をかけてまとめてみたいのです。
〝男には飲ませるナ〟〝男は黙ってサッポロビール〟なんて、一億アルコール中毒を目標にしているとしか思えません。
売って、売って、売りまくる丈が、酒屋の仕事で、（又、美術館をつくるだけで）罪づりをしている丈（で、酒づくりをしている）と考えます。このまゝでは、大変なことになります。先生、そう思うでしょう。
旅先から、気むいたら便り出します。
体には十分気をつけて下さい。　頓首

二月十五日

二伸

今一つニュース、万国橋に、全港湾の経営する病院が出来ます。ハマの仕事がきつい、俺達の病院が欲しいということで、運動していたのが実り、五月から出来ます。一つの、夜明けです。

組合員が一口幾らで出して、医者二人、看護婦、ハリ、キュウの医者も来るとのことで、寿の診療所と並んで、〝労働者の手づくりの病院〟ができます。くわしくは、切り抜きで見て下さい。

〝夜は明け、朝来たるを信じつゝ
我独りでに祈るを覚ゆ〟

一九七八年越冬支援呼びかけ 1.

釜ケ崎の越冬に五〇〇万円のカンパを！

あたたかい支援の手を大阪・釜ケ崎へ

○はじめに

日一日と寒さが加わり、今年も間違いなく冬の訪れを告げています。ご承知のように、釜ケ崎に住む日雇労働者にとって、寒さと飢えは直接死につながります。大阪市の年間行路病死者の数は約三〇〇人で、実にその六〇%は釜ケ崎の日雇労働者だといわれています。しかも、それが冬場に集中するという事実があります。

そのようなきびしい季節を前にして、釜ケ崎に関わりをもっている私たちキリスト者グループは、昨年に引き続き、今年も「キリスト教釜ケ崎越冬委員会」を組織し、労働者の越冬支援への取り組みをはじめています。私たちキリスト者グループが、釜ケ崎の越冬支援活動に取り組んで今年で五回目になります。その間、呼びかけにこたえて、物心両面にわたり越冬をご支援くださった方がたに、まず心からお礼申し上げます。全国各地の皆さまのご支援があってこそ、私たちの活動もできたものと考えております。

○労働福祉行政の貧困

釜ケ崎の越冬支援活動については、少し考えればすぐわかることですが、第一に行政の貧困をあげなければなりません。親子水いらずでこたつに入り、おとそをいただくお正月には、どこの職場も休みます。従って、最もきつい重労働を強いられ、その日その日をしのいでいる日雇労働者に仕事が少なくなるのも明らかなことです。冬場に、一日の仕事にありつけないことは「死」を意味します。もし、「福祉」などという言葉があるとすれば、ここにこそ光があてられなければならないのに、こと釜ケ崎は一向に省みられないのです。

大阪市もこの時期に、大阪南港に臨時宿泊所を設け、労働者を受験地獄以上に厳選し、それこそ強制収容所なみに機動隊つきで隔離しますが、そこにすら入れない労働者は、必然的に寒風吹きすさぶ路上にアオカン（野宿）を余儀なくされます。一九七七年十二月二五日から七八年二月二八日までのアオカン者の総数は九三八五人で、この数字が何よりも行政の貧困を雄弁に物語っています。

労働者の立場に立って、行政が本来の働きをなすならば、何もキリスト者が越冬支援活動などをする必要はないのです。私たちは、「とにかく死者を出さない。生きて春を迎えよう」という嘆きをかこちつつ、今年も越冬支援活動に取り組みたいと考えます。

一九七八年越冬支援呼びかけ 2.

さらなる支援を冬の釜ケ崎へ

キリスト教釜ケ崎越冬委員会中間報告

○炊き出しへの支援を

とにかく死者を出さない活動の一つは、炊き出しです。昨年度は、釜ケ崎日雇労働組合を中心とした「第八回越冬闘争実行委員会」によって、朝・昼・夜の炊き出しがなされ、その利用者数は実に一三万二八五一人で、一日平均一九五人の労働者がこれを利用しました。キリスト教釜ケ崎越冬委員会は全国に支援カンパを呼びかけ、炊き出しに一〇〇万円を支援することができました。釜ケ崎の労働者は偏食と栄養事情が悪く、全国平均の約一〇倍が病人といわれますが、そのため過去の病気とまでいわれる結核が多く、一度受けた外傷もなかなか完治しない状況にあります。炊き出しだけでは決して十分ではありませんが、「生きて春を迎える」ために、今年も炊き出しを続けなければなりません。

○夜間医療パトロール

さらに、死者を出さないもう一つの活動は、夜間医療パトロールです。炊き出しも、夜間医療パトロールも、越冬後も、年間を通じて行なわれ、さらに昨年の越冬で入院した労働者を訪問する医療班活動も続けられてきました。夜間医療パトロールは救急箱を片手にリヤカーを引いて釜ケ崎一帯をパトロールし、救急車を呼び、応急手当てをし、大阪社会医療センターの軒下に敷いた布団に保護し、医療券を発行する等のことを行ないます。昨年度、同期間に布団に保護した総数は五五三五人で、一日平均八五人でした。この夜間医療パトロールには布団・衣類と共に、パトロール参加者を必要としています。

○今年の冬を前にして

昨年に引き続き、公園にはフェンスが張られ、鍵がかけられ、看板には「飲食物をくばったり、ビラをはること」「たき火をしたり、野宿すること」を禁じていますので、今年の越冬も〝しんどい〟ものになりそうです。さらに最近、私たちキリスト教釜ケ崎越冬委員会が置かれている喜望の家と釜ケ崎日雇労働組合所有の解放会館が見渡されるところに、西成署に直結したテレビカメラが新設されました。このように、「死者を出さない、生きて春を迎えよう」という越冬活動までが押し込められていくという状況の中で私たちの越越支援活動は展開されようとしています。具体的には次のような取り組みをはじめます。

一、大阪市・府への抜本的な解決を求める働きかけ……要望書の提出とその実現

一、労働組合を中心にしてなされている炊き出しへの支援カンパ……一〇〇万円

以上

一、飢死者・凍死者・病死者を出さないための夜間パトロール

一、炊き出しの手伝い……準備と給食

一、その他必要な活動

これらを実現するために今年も、専任者をおいて積極的に取り組みたいと考えています。

これらの活動が実現されるためにも、全国の皆さまの祈りとご支援を心からお願いいたします。

○はじめに

巷では暖冬異変などといわれるが、ここ日雇労働者の街・釜ケ崎では、例年に比べて青カン（野宿）者の数が圧倒的に多く、夜間医療パトロールで死者を発見するというきびしい冬を迎えています。

わたしたちは「とにかく死者を出さない。生きて春を迎えよう」を合言葉に、十二月二十五日から二月末まで越冬支援活動を続けますが、とりあえずここに中間報告をなし、全国のみなさまのこれまでの支援を心から感謝するとともに、この活動を全うするためにも、さらなる協力を呼びかけます。

○今年の越冬の目標

わたしたちは、昨年の越冬から引き続き、医療班を中心に越冬で入院した患者の訪問、毎週土曜日の夜間医療パトロールなどをしてきましたが、いよいよ十一月から越冬への本格的な取り組みをはじめ、専従者をおき、今年の越冬支援活動の目標を次のように決定しました。

1　釜ケ崎の越冬の抜本的な解決を求めて行政（大阪府・市）への要望活動をする。

2　炊き出しに一〇〇万円以上のカンパ

3　死者（凍死・餓死）を出さないために夜間医療パトロールをする。

○行政の対応

釜ケ崎では医療問題（特に結核、アルコール中毒と合併症）が大きな問題なので、わたしたちは大阪市環境保健局、西成保健所と団体交渉をし、割合好意的な回答を得ました。しかし、なんらの保障もない立場にある日雇労働者は、医療保護がなければ入院もできません。そこで、今回は市会議員へも働きかけをなし、市会議員を介して次のような「要望書」を大阪市当局へ提出しました。

要　望　書

1　臨時宿泊所については、真に必要な人が入所出来るよう、入所資格を撤廃していただきたい。

2　期間中は、毎日受付を行ない、入りたい青カン者がいつでも入所出来るようにしていただきたい。

3　場所は、青カン者の保護・入所に便利なように釜ケ崎の近辺に設置していただきたい。

4　民主的かつ人格的対応が出来るように、管理方法を改めていただきたい。

5　病人が多いので、定期的に移動検診車を出していただきたい。

6　臨時宿泊所とは別に、極度の生活困窮者を一〇〇人程度収容できる施設を、凍死・餓死のおそれのなくなる二月末までの間、釜ケ崎近辺に開設していただきたい。

7　医療問題については、入退院歴のいかんにかかわらず、入院必要患者の完全入院を、生命尊重の立場から保障していただきたい。

8　通院患者の生活を保障していただきたい。

9　退院後の生活を保障していただきたい。

10　入院時、すみやかに生活必需品を支給していただきたい。

これは、最低限必要な要望です。ところが大阪市は、「キメ細かにやっているキリスト

教と協力したいが、信教の自由の立場から困難」と、わたしたちの顔色をうかがいながら、労働者のおかれている現実を見ようとはしません。それのみか、「労働者の問題は大阪市だけの問題ではない」と責任を回避し、かといって国への働きかけはしていません。むしろ、労働者の自立に対して、警察権力を用いて弾圧をしています。臨時宿泊所開設時のものものしい機動隊の出動など、理解に苦しみます。

○炊き出し

そのことは公園についてもいえます。大阪市は十二月二十二日、それまで炊き出しをしていた公園を含めて三つの公園を、なんらの理由も明らかにしないまま、またもや閉鎖してしまいました。炊き出しは越冬闘争実行委員会の手で、路上で配られています。朝九時、昼一時、夜七時の三回の炊き出し時には、時間前から長い列ができます。一回平均九七人（十二月二十五日〜一月十二日）が利用しています。食事の内容は、からだの弱っている人を配慮して雑炊ですが、みなさんのカンパによっては栄養を濃くし、お代りをすることもできます。

朝九時の炊き出し時には医療券を発行し、通院、入院のつきそいをしていますが、一月十日までに延べ二三七枚の医療券を発行しています。炊き出しの準備、給食、医療券の発行に人手を必要としています。

○夜間医療パトロール

わたしたちが力を入れている活動のもう一つは夜間医療パトロールです。夜間医療パトロールの目的は、凍死者を出さない、病人やけが人の救急治療と保護、また労働者同志が互いに助け合って生きていくきっかけをつくることにあります。

午後十時からチームを組み、二班に分かれて釜ケ崎一帯をパトロールしています。スープ、救急箱、懐中電灯、衣類などを持ち、リヤカーを引いて回ります。パトロールの内容は、必要な人に救急車を呼び、応急処置をし、リヤカーで大阪社会医療センターの軒下に敷いてある布団の中に保護することなどです。そのため布団のカンパとパトロールの参加者を必要としています。

次の表は、昨年度と今年の青カン者の比較ですが、青カン者の数は年々増加しています。大阪市は十二月二十九日〜一月十日の間、大阪南港に臨時宿泊所を設置し、約千人を収容しましたが、その期間に三百五十人以上の青カン者がいることがわかります。これもまた、大阪市の民生行政が、真に必要な労働者に無縁であることを証明しています。

○共同生活の場を

このような現実に直面して、わたしたちは、労働者同志が互いに助け合っていける共同生活の場の必要を痛感しています。そのために今年の越冬から積立てをし、近い将来共同生活の家を購入することを実現したいと望んでいます。労働者同志が寝食を共にし、自由な交流の中から立ち上がってこそ、問題解決の糸口があることを確信します。このことにみなさまの理解と協力をお願いします。

○協力要請

1　資金、布団のカンパ

資金の方は、一月二十日で約三七〇万円集りました。五〇〇万円の目標にあと一歩なのでよろしく。布団がとくに不足しています。

2　パトロールへの参加

毎日夜十一時からはじまります。喜望

の家に宿泊もできます。ぜひ、釜ケ崎に足を運んでください。

3 衣類整理、医療券発行、炊き出し
婦人会単位などで昼間参加してください。

4 共同生活の場へのカンパ

年間を通して協力をお願いしますので、心にとめてください。

一九七九年一月

キリスト教釜ケ崎越冬委員会
代表　神父　S・ハインリッヒ

キリスト教釜ケ崎越冬委員会構成団体

1 暁光会大阪支部
2 日本福音ハーテル教会・喜望の家、ベビーセンター
3 日本キリスト教団・いこいの家
4 愛徳姉妹会
5 フランシスコ会・老人センター、子どもの広場
6 守護の天使修道会
7 釜ケ崎地域問題研究会
8 関西キリスト教都市産業問題協議会

編集後記

●

越冬日録をうけもたせていただきましたがパトロール日誌を一枚一枚めくっていく時に参加者のあの叫び、この訴えが躍り上って目に入りました。この人の綴るこの一句、一言葉が、あの夜、対に向って生きていた釜ケ崎労働者のあの状況での生きる姿をよく描き出しているのでした。それでこゝに、こんなに生きていた生命があったとせめて文字に活かしたかったので、材料を半分にする様に云われて惜しく思いました。（シスター・石戸）

●

釜ケ崎の問題は多岐にわたっている。越冬の問題だけでも労働、生活、医療の問題などが複層しながら絡み合っている。それらは一つひとつを切り離しては考えられない。そしたなかで、キリスト教釜ケ崎越冬委員会は、これまで五回の越冬の闘いを支援してきたが、今年の越冬あたりから少しく方向が見えてきたのではないか、と思っている。

それは結核とアルコール中毒問題である。これとて、もちろん、全体の問題から切り離しては考えられない。しかし一つの問題に集中的に関わることによって、かえって全体の問題の解決の糸口になりはしないか。そのようなことをしきりと考えている今日この頃である。（NON）

●

今回で越冬報告書も四冊目になる。過去三年の報告書にあらためて目を通してみて、スローガンが全く変っていないのに気付く。それは、そのまま釜ケ崎の状況の厳しさを物語ってはいないか。しかし、われわれは、そのなかで、アルコール問題と結核対策に焦点をさだめて「釜ケ崎の冬」にたちむかいたいと決意をあらたにしているところだ。重ねてみなさんのご支援を乞う。（Q）

発行・キリスト教釜ケ崎越冬委員会
編集・越冬報告書編集委員会
発行所・大阪市西成区萩ノ茶屋二ー八ー一八喜望の家気付
電話　〇六ー六四七ー三九四六
発行日・一九七九年八月一日
頒価・三〇〇円
印刷・木村桂文社